The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	玄宗・楊貴妃・安禄山と桐壺帝・藤壺・光源氏の寓意 : 続古事談から見る源氏物語
Author(s)	荒木, 浩
Citation	詞林. 2004, 36, p. 11-29
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/67525
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

玄宗・楊貴妃・安禄山と桐壺帝・藤壺・光源氏の寓意

――続古事談から見る源氏物語――

荒木　浩

はじめに―問題の所在と本稿の輪郭

楊貴妃を寵愛する玄宗皇帝は、後の逆臣、安禄山をも深く寵愛し、安禄山を楊貴妃の養子となした。その人間関係には、いずれ楊貴妃・安禄山密通説が発生し付随して、円還する三角形をなす。そしてまたその関係にきしみが生じて安禄山は乱を起こし、楊貴妃が死を迎えることで、すべては破綻する。『長恨歌』をめぐる享受の前提に、こうした人間関係の理解があったと考えてみる。すると、この三角形は、『源氏物語』の桐壺帝・藤壺・光源氏の三角形への寓意として顕現する。本稿では如上を資料に即して追跡し、その復元と対比を行う。そこから、『源氏』桐壺に深い影響を及ぼすとされる『長恨歌』が、実はきわめて限局された部分にのみその影響が及ぶとされ、直接的には光源氏の形象に関わらない、と見られていることの意味を再考し、広い意味での「長恨歌体験」[1]の流れの中で、『源氏』の構想をも問い返したい、と考える。

その考察は、建保七（一二一九）年の跋文をもつ『続古事談』に載る一連の玄宗・楊貴妃・安禄山に関する説話解釈を起点とする。そこで本稿は、まず『続古事談』記述の資料性を確認することから出発する。

一　信西「長恨歌絵」の寓意―『続古事談』の資料性

『平治物語』冒頭、後白河の「寵愛」深い、「当時無双の寵臣」藤原信頼と、後白河院乳母紀二位藤原朝子の夫として「当世無双、宏才博覧」、「とぶ鳥もおと」す「権勢」を誇った藤原通憲信西の不和、「不快」が叙述される。その頃、「家にたえてひさしき大臣の大将にのぞみをかけ」る信頼に対し、後白河院は許諾の意を含みつつ信西に諮る。当然、「信頼などが大将にな」るならば「この世は損じぬる」と嘆く信西は、多くの先例を引きつつ理を説いて、「信頼などが身をもつて大将をけがさば、いよ〳〵おごりをきはめて、謀逆の臣となり、天のために滅ぼされ候はんこと」と院を諫める。しかし後白河は「げにとも思召たる御気色もな」く、聞き入れる様子も無い。「信西、せめてのことに、大唐、安禄山がおごれ

るむかしを絵にかきて、院へまいらせたりけれども、げに思しめしたる御こともなかりけり」、と語られる（「信頼・信西不快の事」、新大系）。

この「平治の乱のあるべき事をかゞみて、後白河院に御心をつけ申さん為に思ひくはだて」（『花鳥余情』一、『龍門文庫善本叢刊』）たという信西の〈安禄山絵〉は、次の『玉葉』の記事にいう「長恨歌絵」に相当すると考えられており、『平治物語』にいう逸話が史実に基づくものであったらしいことがわかる。(2)

抑長恨歌絵相具天、有二一紙之反古一、披見之処、通憲法師自筆也、文章可レ褒、義理悉顕、感歎之余、写二留之一、其状云、

唐玄宗皇帝者、近世之賢主也、然而、慎二其始一棄二其終一、雖レ有二泰岳之封禅一、不レ免二蜀都之蒙塵一、今引二数家之唐書及唐暦、唐紀、楊妃内伝一、勘二其行事一、彰二於画図一、伏望、後代聖帝明王、披二此図一、慎二政教之得失一、又有二厭離穢土之志一、必見二此絵一、福貴不レ常、栄楽如レ夢、以レ之可レ知歟、以二此図一、永施二入宝蓮華院一了、于レ時平治元年十一月十五日、弥陀利生之日也、

沙弥（在判）、

此図為レ悟二君心一、予察二信頼之乱一、所二画彰一也、当時之規模、後代之美談者也、末代之才士、誰比二信西一哉、可レ褒可レ感而已、

（『玉葉』建久二（一一九一）年十一月五日条、国書刊行会本）

この絵について池田利夫氏は、「既に失われた信西の作品を、余りにとかく推定しても始まらないかも知れない」といい、また「天皇がまつり事を怠り、天下を紊すかと惧れる時、平安人士が直ぐ長恨歌を想起したらしいことは、…「楊貴妃のためしもひきいでつべうなりゆく」とある源氏物語の描写に依っても知られるところである」としながらも、この〈絵〉（の文章）に託された信西の寓意を推し量るのに重要な次のような推論を記している。

信西の目から見れば、長恨歌は、玄宗が楊貴妃の色香に溺れたという玄宗の人間的な面よりも、その結果として、楊国忠や安禄山などの妄官を重んじ、内乱を惹起した帝王としての玄宗の器宇を問う物語として映ったであろう。従って、兼実の見たのは「長恨歌絵」であるけれども、そこに述べられているのは、叙情ではあるまい。「文章」は、白居易の長恨歌よりも、陳鴻の長恨歌伝により傾き、更に、この絵の「状」に見えるように、唐書、唐暦、唐紀、楊妃内伝を引用した玄宗一代記、安禄山の乱始末記という性格が強かったであろう。（注2所掲論文）

これを承け、その寓意の範囲を明確にするためにより踏み込んでいえば、『平治物語』では明確に、後白河院のやや常軌を逸した信頼重用・寵愛への反撥の文脈から、信西の同絵執筆を語る。ゆえに信西の寓意は、後白河に玄宗をなぞらえ、

信頼を安禄山に寓する、という理解だけではおそらく不十分で、各々の帝と安禄山・信頼それぞれの君臣の関係性の相似への含意までをも念頭に置いて、その作意を問わなければならない、と思う。またその復元は、ある程度可能なのである。

すなわち、「アサマシキホドニ御寵アリ」（『愚管抄』五、旧大系）と評される信頼と後白河との関係性の含意とは、明確に「男色」（『塩尻』）である。そしてそのことを夙に語る資料が、『続古事談』であった。

鳥羽院、宇治に御幸ありて、経蔵ひらきて御覧じけるに、此経蔵は、よのつねの人いる事なきに、富家殿御前に候給て、播磨守家成時の花にてありければ、御気色にかなはんとやおぼしけん、召入られけり。後白河院御幸有ける時、このことをやきゝをよべりけん。右衛門督信頼めしあらんずらんとおもひけるに、法性寺殿いとさやうの気おはせで、召事なくてやみにければ、人しれずむつけばらだちけるなごりにや、範家の三位といひける人を軽慢して、にやくり三位、き三位、散三位、よく三位、むことり三位などはやしたりけるとぞ、世の人いひわらひし。まことにや。（一―二三）[3]

鳥羽院の「時の花」家成と相似的な関係の逸話で後白河と信頼を語り、また同類の範家（法性寺殿藤原忠通の寵愛人）を「にやくり三位」（若気（にやけ）を踏まえるという）と罵倒する信頼を嗤う「世の人」を描く『続古事談』は、それぞれの「男色関係」（五味文彦「院政期政治史断章」『院政期社会の研究』、一九八四）を意識的に語っている。そして、「平治の乱において」、「後白河院と藤原信頼との男色の関係を軸に戦乱がおこされている」（同上）との指摘があるように、その「男色」は政治の根幹を貫き、平治の乱という国家叛逆へとつながった。[4]

それでは安禄山と玄宗はどうか。安禄山が信頼に匹敵する叛乱を起こしたことはいうまでもない。問題はそこに信頼と類同する「寵愛」を読みとれるかどうか、である。同じ『続古事談』は、ここでも「長恨歌絵」に関連する人物について、次のような説話連続を形成しており、今の問題についても、引き続き重要な記述を含む。

唐の玄宗皇帝は、近世の明王也。（以下姚崇、宋璟との逸話、下略）（六―一（1））

されば大国のならひは、いかなる君にもあれ、臣の諫をきゝいれてもちゐる心あるを国王の器量とはするなり。（以下三皇五帝から、漢高祖に言及、「世の末の王のありさまをあらはしけるなり」とし、楚の項羽を対比的に批判）（六―一（2））

楊貴妃は尸解仙といふものにてありけるなり。仙女の化して人となれりけるなり。尸解仙といふは、いけるほどは人にもかはらずして、死後にかばねをとゞめざるなり。或唐書の中に、貴妃を改葬したる事をいふに、「肥膚已

壊、香囊猶在」といへり。このゐむにあへり。はだへすがたなどはなくて、香囊ばかりありけり。貴妃はもと親王の妻也。それを玄宗めしたるなり。長恨歌伝に「寿邸にえたり」とあるは、彼王の居所をいへるなり。安禄山は又その外の密夫なり。禄山はゆゝしき玄宗の寵臣也。

（六―二）

或人に問ていはく、「漢家に男色の事ありや。中にも国王のこの事をし給へる事やみえたる」。其人答ていはく、「故入道〈長方卿〉しめされしは、漢成帝といふみかどの御時、董賢といふものさやらんとみえたり。書にいはく、「与帝臥起」と云々。のちには余に寵して、位をゆづらんとするに及ぶと見えたり」。

（六―四）

張喩といふもの有けり。（張喩が、死後玉妃となった楊貴妃に会う逸話、下略）

（六―五）

玄宗の御子粛宗…（安禄山退治、即位、玄宗への不孝）

（六―六）

この配列や説話内容から読みとるべきことは多いが、今は措き、[3] 一二を述べれば、まず『続古事談』は『玉葉』読者であったとおぼしいから（一―一五、一―三六などが『玉葉』関係話）、六・二（1）にいう「唐の玄宗皇帝は、近世の明王也」と『玉葉』所引信西の書状の「唐玄宗皇帝者、近世之賢主也」という表現の通用と、また両書の、その後の玄宗の凋落を暗示する文脈と説話配列の類似には意味がある。しかしより注目すべきことは、六・四で楊貴妃説話を語った末尾に、「禄山はゆゝしき玄宗の寵臣也」と語ることの意味である。そこに付される「ゆゆし」は、臣下であり乍ら妻貴妃と密通する安禄山のまがまがしさを語りつつ、あたかも、「アサマシキホドニ御寵アリ」とされる信頼への評語に似る。しかもそう語った直後に、問答の形式を敢えて直接して、中国の男色の有無に関する言説を続けている。『続古事談』諸本の原文は、通常、改行のみで次話に続ける形式をとるから、形態上は、六・三と同四とは改行をしただけの一連の文章で、後者は前者の評語とも読めるものであり、あたかも六―二（1）を承けて「されば大国のならひは…」と展開する六―二（2）と同一の構造となっている。[6] 説話は、或人の問答の中の引証としての長方の言の、さらにその中にある。そしてその問答は、中国に於ける君臣間の男色の存在を証明し、しかもそのことが帝の位をもあやうくする例として論じてられているのである。

すなわち、『続古事談』は、玄宗の安禄山寵愛の逸話に触れつつ、その過剰な恩寵の秘密の所以に、玄宗の安禄山への、男色としての寵愛を窺おうとしていた。ならば、『続古事談』作者には、信頼と安禄山とそれぞれの帝との関係性が、ともに男色による傾国、国の乱れの起因であるとして、その類比性に気づいていた可能性がある。『続古事談』[7] 巻六漢朝部に、本朝との比較や寓意的性格がいわれることも、上記の理解の

資となるかも知れない。

後掲する中国の資料に見るように、玄宗の安禄山に対する「寵」はいわば常套句であったが、そこに玄宗・安禄山理解に男色を窺わせる明確な徴証があるわけではない。『続古事談』にそうした関係性が見えた所以は何故か。一つの可能性は、信西の「長恨歌絵」の記述であろう。

まさしく「既に失われた信西の作品を、余りにとかく推定しても始まらない」のだが、『続古事談』作者は『玉葉』読者であるのみならず、『玉葉』記主兼実への近侍を想定すべき人物であると考えられている。[8] ならば彼が、兼実も見た信西の〈安禄山絵〉を実見したか、あるいはその内容へのしかるべき理解を持っていたと考えてみることには、蓋然性がある。『続古事談』の説話叙述のベクトルの一致は、「数家之」中国の書物を集成・抜粋したという信西〈安禄山絵〉の、またそれが「長恨歌絵」と呼ばれていた以上、広い意味での当時の『長恨歌』説話の世界の、一つの理解の方向を示していると見ることもできるのではないだろうか。

二　安禄山と楊貴妃密通説の発生と白居易「胡旋女」

そうした憶測を含みつつ、『続古事談』の資料性と方向性を確認した上で、問題としたいのは、同じ説話で「安禄山は又その外の密夫なり。禄山はゆゝしき玄宗の寵臣也」と併記して語られていることだろう。ここで記される、安禄山が楊貴妃の密通の相手、とされる言説の根拠、「そういう捉え方が何に由来するのか、大いに検討を要する」（増田欣「漢朝篇に見える楊貴妃説話」）のである。それは、「楊貴妃と安禄山の間にそういう関係があったとする記事は、新旧両『唐書』の中にも見えないし、わが国で平安朝の初めから愛読された「長恨歌」や「長恨歌伝」にも記されていないからである」（同上）という事情があるためであり、また後述するように、その説の享受の時期によっては、大きな文学史的意味を有する説話となりうる、と私に考えるからである。

玄宗・安禄山男色説には古い明証がないが、楊貴妃・安禄山密通説には書証がある。この説が明確に記され、後代の定説となっていくのは、中国北宋元豊七（一〇八四）年成立『資治通鑑』の次のような記述の影響が大きいとされる。

甲辰、禄山生日。上及貴妃賜二衣服宝器酒餞一甚厚。後三日、召二禄山一入二禁中一、貴妃以二錦繡一為二大襁褓一裹二禄山一、使二宮人一以二綵輿一舁レ之。上聞二後宮歓笑一、問二其故一、左右以貴妃三日洗二禄児一対。上自往観レ之、喜、賜二貴妃洗児金銀銭一、復厚賜二禄山一、尽レ歓而罷。自レ是禄山出二入宮掖一不レ禁。

或与二貴妃一対食、或通宵不レ出。頗有二醜声一聞二於外一。上亦不レ疑也　（天宝十載正月、中華書局版）

安禄山の誕生日に、帝と楊貴妃が盛大な褒美を賜り、三日たって宮中に招き、「錦の産衣にくるまれて、色どり美しい

輿に乗せられ、宮女たちに舁がれて」いく。帝は後宮の歓笑ぶりを聞いてそのわけをというと、宮人達は、楊貴妃様が「子供が生まれて三日目に初湯を使わせる」「洗児会」を模してなさるのだと答えた。帝はその様子を御覧になって喜悦し、楊貴妃にはその費用を賜り、安禄山に厚く褒美を与え、その後は、禄山が禁中に出入りすることを許された。「あるときは夜もすがら貴妃と差し向かいで食事をし、あるときは夜もすがら貴妃の部屋にこもったままというありさまで、いつしか二人のスキャンダルが宮廷の外にも漏れ拡がっていった」（以上、カギ括弧内は増田論文）。しかし帝は依然、二人の仲に疑いを持たなかった、という奇怪な叙述である。

後代の文学作品などではおなじみのこうした説の発生と展開について、増田氏は、曾永義氏の論述を引き、次のようにまとめて説明する。[9]

楊貴妃と安禄山の「穢乱」つまり淫行による風俗壊乱について、氏（＝曾氏、引用者注）はおおむね次のように論じている。これは史実ではないが、二人の中を誹謗する見解は早くから醸成されていた。例えば、白居易は新楽府「胡旋女」の中で、二人が天下を乱した張本であることを明らかにして君主の鑑戒としたのであるが、彼が至るところで二人の名を並べたために、二人の間にはかなり親密な関係があったのではないかという連想を生ぜしめた。また、李肇の『唐国史補』の記述はいっそうあからさまで、玄宗の恩寵が深まるにつれて安禄山は御前で冗談まじりに話をしたが、貴妃はいつもその座におり、玄宗の命で貴妃の姉たちと兄弟の縁組みをしたこともあって、安禄山は貴妃に心を動かしていたから、馬嵬でその死を聞くや数日間嘆き悲しんだのである。禄山の叛心は、李林甫によって培われ楊国忠によって撃発されたのだとはいえ、彼自身の内部にも原因があったのだと書かれている。このように、禄山の叛逆を貴妃の美貌と関係づける考え方がつとにあったので、唐末五代の姚汝能（『安禄山事迹』）、温畧（『天宝乱離西幸記』）、王仁裕（『天宝遺事』）等に至ると、話に肉付けをして後宮の風紀紊乱の話に付会したのである。

中国資料において、こうした説の淵源を白居易「胡旋女」に見ることが出来、唐の、李肇『唐国史補』にははやくも安禄山の楊貴妃思慕が描かれている、という指摘は重要である。それらと本邦の信西の挙げる資料との関係は明確ではないものの、[10]『長恨歌』や『長恨歌伝』あるいは『長恨歌序』から「再構築」される「長恨歌の物語」、すなわち、「玄宗と楊貴妃はもと上界の仙人仙女であった。しかし上界での二人の「恩愛」の罪により、下界に流され、夫婦になった。馬嵬で楊貴妃が死んだ後、一旦「恩愛」は絶えたが、方士が蓬莱を訪れたことにより、仙女楊貴妃に再び「恩愛」が生じた。かねてからの比翼連理の誓いのように、再び生まれかわって夫

婦となるであろう。それを「恨み」とする」と拡がる逸話とともに、[11] 如上の安禄山・楊貴妃説話―信西の絵の呼称に倣えば、これも長恨歌説話に含まれる―も、本邦において、併せ早くから享受されていたことが予想されるからである。[12]

さて、そのことをもう少し細かく見てみよう。その淵源とも目される白居易の「胡旋女」は、太りすぎて腹の肉が膝まで垂れ、歩行にも困難なようすだった安禄山が、帝の前で「作二胡旋舞一」、「乃疾如レ風」（『旧唐書』及び『新唐書』安禄山伝、天寶六年）という特技を披露したことにまつわる逸話に関連する「新楽府」（『白氏文集』巻三）の一篇。安禄山と楊貴妃が登場する次の一節が重要である。

中原自有胡旋者　鬪妙争能爾不如　天宝季年時欲変　臣妾人人学円転　中有太真外禄山　二人最道能胡旋　梨花園中册作妃　金雞障下養為児　禄山胡旋迷君眼…貴妃胡旋惑君心…

（中原に自ずから胡旋する者有り　妙を鬪はし能を争ふ爾は如かず、天宝の季年　時変ぜんと欲す、臣妾の人人円転を学ぶ、中に太真有り　外に禄山あり、二人最も道ふらく　能く胡旋すと、梨花園の中に册して妃と作す、金鶏障の下に養はれて児為り、禄山の胡旋は君の眼を迷はす…貴妃の胡旋は君の心を惑はす…）

日本の平安末期注釈書には、その二人を深く結びつけているのが、他ならぬ玄宗のそれぞれへの寵愛であった、と強調される。

中原者長安也、楊貴妃安禄山皆侍テ宮内ニ倶ニ誇ル帝寵ニ、玄宗愛之ヲ無シ所悟トル、故ニ指テ此ノ二人ヲ曰中原ニ胡旋スル者ト也、

（醍醐寺本・信救『新楽府略意』上、太田次男「釈信救とその著作について―附『新楽府略意』二種の翻印―」『旧鈔本を中心とする白氏文集本文の研究』下、一九九七、初出一九六六）

右は、胡旋舞という舞を、「雑種胡」（『旧唐書』他）であった安禄山はともかく、なぜか楊貴妃も同様に得意としたという史書にはない記述を載せ、ほぼあからさまに「二人」の関係がほのめかされていることを、教えてくれる点でも、重要である。

そしてさらに注目すべきは、「胡旋女」には安禄山の楊貴妃養子説がことさらに描かれていることだろう。そのことはやはり日本の「新楽府」古注にも強調される。

外安禄山者安禄山者白廷翰唐蒙求云、楊貴妃之養子也、養在宮内……金鶏障ノ下ニ養テ為児一者安禄山被テ養宮内ニ不垂堂一セ、后妃ノ下トニハ立タリ画ケル鶏ヲ之障子ヲ云々　唐蒙求ノ注云、安禄山為リ楊貴妃ノ養子侍テ宴ニ先ッ拝ス母ヲ…

（醍醐寺本『新楽府略意』）

安禄山ハ楊貴妃ノ養ナヒ子也、

（真福寺本「新楽府注」（正嘉元年書写）、太田次男前掲書「真福寺蔵『新楽府注』と鎌倉時代の文集受容―附『新楽府注』の翻字―」、初出一九六九）[13]

安禄山と楊貴妃の養子関係を描かない『長恨歌』や『長恨歌伝』に対して、安禄山の伝記に於いて、楊貴妃の養子となったという要素は、本来欠くことの出来ない重要なプロットであった。[14]

安禄山が養子となる経緯の概要は、「かねがね禄山を忌み嫌って、しばしば玄宗に彼を除くよう進言」する「皇太子」（後の粛宗）の思いに相反し、「玄宗は禄山へ親愛を示そうと、勤政楼に群臣を集めて祝宴を張った。禄山の座席だけは玉座の東隣にしつらえ、金鶏をあしらった障子を設け、簾をかかげて栄寵ぶりを満座に示した。この時も皇太子は、臣下の身で天子と同席する例はないと強く反対したが許されなかった。それどころか、楊貴妃の一族と義兄弟の約を結ばせ、親しく往来させることにした。禄山はそれに満足せず、貴妃の養子にしてくれと頼み、奇妙な親子ができた」（藤善眞澄『安禄山』）というもの。そしてそこには、玄宗の楊貴妃への寵愛が絡まる。

安禄山は玄宗に「寵」された男（『旧唐書』巻一〇六・楊国忠伝に「時安禄山恩寵特深」など）であり、その寵愛は楊貴妃へのそれと等しかった（前掲『新楽府略意』など）が、それぞれへの寵愛は、玄宗の偏愛の中で、安禄山を楊貴妃の養子とするという三角形をなすことで完結した。そのことは、『旧唐書』の簡潔な記述の中に逆によく窺える。

天宝中、范陽節度使安禄山大立二辺功一、上深寵レ之。禄山来レ朝、帝令二貴妃姉妹一與二禄山一結為二兄弟一、禄山母事二貴妃一。（『旧唐書』巻五一・楊貴妃伝）

安禄山の出世と傾国の乱は、玄宗の寵愛に端を発し、その寵愛と一体の楊貴妃との養子関係でより深い一歩を根ざした。その史実は、少なくとも安禄山の楊貴妃に対する母としての敬愛を、建前としてはすでに語っているが、その敬愛を楊貴妃と安禄山の愛情、密通と解して即ち、もう一つの長恨歌説話が成り立つ。密通説と玄宗の安禄山寵愛を語って養子説には触れない『続古事談』にも、当然そのことは周知の階梯として認識されていたはずである。その知識を前提に『続古事談』は、『長恨歌』などを通じて、誰でも知っていることは敢えて触れず、『長恨歌』には描かれなかったことのうち、「楊貴妃に先夫があり、先夫が玄宗の子寿王であること」、「安禄山と楊貴妃のスキャンダル」（神田秀夫「白楽天の影響に関する比較文学的一考察」『国語と国文学』一九四八―一〇）、さらに、よく知られていない説である楊貴妃尸解仙説とその論拠[15]、そして玄宗の安禄山寵愛に男色説があるなどに力点を置いて、提示して見せたことになる。

三　『長恨歌』の前提と「新楽府」的楊貴妃

紫式部[16]を持ち出すまでもなく、「わが国における白氏文集愛好の主流は長恨歌（後には琵琶行も）と物語化された部分の新楽府」（太田次男「白居易及びその詩文の受容を繞って」『白

居易研究講座』第三巻、一九九三）にその大きな比重がある。

『長恨歌』愛好と「新楽府」享受の流れの中で、ごく普通に白居易の作品を読み合わせていけば、ごく自然に両者は結びつけられる。あるいはそれは、詩的なロマンスに中心を置き、安禄山との養母関係など、傾国の乱のもう一つの側面を歌わない『長恨歌』の前提として、次のように説明されることがあったかも知れない。

楊貴妃ハ、本ノ后ナラネトモ、夜ハ申ニ及ハス、昼ハ、一日酒宴ニテ、日ヲ暮シ、夜ハ、専ら夜、時安禄山ト云者アリ、楊貴妃ノ気ニアイ、後ニ貴妃ノ養子ニナル、前ニ、何トヤラン、謀反ノカタチアル者ナレハ、只カヤウノ者ヲハ、誅罰セラレヨト、臣下ノ中ニ、賢ナル人カ、申セトモ、遂ニ御領掌ナシ、或時安禄山ニ、戎ノ起ルヲ、平ケヨトテ、差向ラルヽニ、戦負テ逃タリ、唐ノ法ニ、軍破レハ、大将、必生害スル間、是ヲヨキ次ニシテ、皆訴申セトモ、大将ノ失ニアラス、士卒ノ過也ト云テ、此時モ生害セラレス、或時、殿中ニ大勢笑フ声ス、何事ソト問ヘハ、皇子ノ御生有テハ、如此スルトテ、若キ女房達、錦繡ノムツキヲ、手ニカケ、安禄山ヲ裸（アカハタカ）ニ成シテ、ムツキノ上ニノセテ、愛セラル、大鬚ノ男カ、カヤウニセラルヽヲ、ヲカシカリテ、笑イトシメク也、結句後ニハ、貴妃ヲセヽル（＝ちょっかいを出す、玩弄するの意）ナド云　雑説アリ、カヤウノ事ヲ見苦トテ、臣下ノ可然ノ人、諫メ申セトモ、御門更ニ、御承引ナシ、結句大国ノ守護ニ成サル、

（坂詰力治他「京都大学附属図書館蔵『長恨歌并琵琶行秘』翻刻」『東洋大学大学院紀要』二一、一九八四、なお國田百合子解説・校異『長恨歌・琵琶行抄』の影印を参照した）

『長恨歌』仮名抄の天理本や内閣本以下、ほぼ同文であるが（國田百合子編『長恨歌・琵琶行抄諸本の国語学的研究』校異篇参照）、もちろん右の記述には資料批判が必要である。これと同系統の注釈書を本にしていると言われる御伽草子『長恨歌』の「前文」には次のようにある。[17]

（安禄山が天宝二載初めて胡に来た時）太子これを御らんするにのちには、ほんぎやくをくはたてむする、をそろしきさうのありければ、みかどへそうし、これをちうせんとのたまふに、みかどいかゝおぼしめしけん、さらに御ゆるしなかりけり、あまつさへ禄山、いかなるはうべんをや、めくらしけん、やうきひの御きに、とりいりて、やうしにそ、なりにける（以下洗児のエピソードを述べ）「大ひげのはへたるろくさんをたらひにいれ、ゆをあみせ、にしきのむつきなとにていだきあぐ。そのありさまかおかしきとて、女ばうたちわらひのゝしり給ふなり。みかとこれを御らんじ、よろこはせたまふ事なのめならす。これよりろくさんこうきうに、出入することを、いましめられす。あるときは、きひと、あひむかひてしよ

くし、あるときは、夜とともにあそび、しうせいように、きこふるといへとも、みかどさらにうたがひたまはす。（中略）「やうこくちうにおほえをとりたることを、やすからすおもへは、内々やうしをうつて、天下をみたらんと、たくみけり。そのけしきかくれなかりしかは、ぐんしんおの〳〵ろくさんはむほんおこすへきものなり。かねてこれをちうしたまはすは、後のわざはひになりにへしと、たひ〳〵そうしたてまつると、いへども、やうきひのてうしんなるかゆへに、さらにこれをもちひたまはさるは、代のほろびん、すいさうなるへし。…」

（『長恨歌（ライデン民族博物館蔵）』、國田編『長恨歌・琵琶行抄諸本の国語学的研究』に拠る）

この資料になると、明確に『資治通鑑』との文言の一致による、関係が見て取れるから、このままの形で、時代を安易に遡及して考えることは厳に避けなければならない。しかし、概ね上記のような前提は、これまで述べてきた『長恨歌』説話の〈文脈〉として、相応には蓋然性を有する。

しかし実はそのように『長恨歌』の〈文脈〉を描くには、一つ重要な問題が残る。すなわち、「胡旋女」に淵源を持つ楊貴妃像と『長恨歌』のそれとには、明瞭な楊貴妃像の差異があるからである。白居易は、『長恨歌』で楊貴妃を「初長成、養在深閨人未識、天性麗質難自棄、一朝選在君王側」という、まるで「箱入娘」（遠藤実夫『長恨歌研究』）のように叙述し、玄宗との美しい純愛のヒロインとしての楊貴妃を歌い、その世界を閉じる。一方で、「胡旋女」をはじめとして「新楽府」では、対照的な「悪女としての楊貴妃像」を描くのである。[18]

優れた『長恨歌』と「新楽府」の読者なら、後者は『長恨歌』の安易な前提であるより先に、あるいはノイズとしてあり、むしろその両者のずれを強く意識することになるのではないか。あたかも二人の楊貴妃がそこには居て、一方では帝との純愛を貫いて死に、一方では帝に背いて、養子、義理の子と密通する。『長恨歌』の純愛世界に溺れ殉ずるのでない限り、それは、いかにも文学的創造力を刺激する素材ではないか。しかもその素材を享受するためには、白居易という高度な教養世界の理解、知的な想像力が不可欠なものとして前提されるのである。

四　二人の楊貴妃と『源氏物語』創造

「長恨歌体験」の広がりを、如上のもう一人の楊貴妃に拡げ、さらにそのイメージと『長恨歌』とのずれが引き起こす創造力の展開として捉えてみる。そこで、あらためて『長恨歌』がその創作の大きな駆動力になったことは間違いがない『源氏物語』の「長恨歌体験」について、再考してみたい、と思う。というのは、「長恨歌を用いて「桐壺」巻の前半を作った」（玉上琢彌「桐壺巻と長恨歌と伊勢の御―源氏物語の本性

（その四）―」（『源氏物語研究』一九六六）といわれるほどの『源氏』桐壺の『長恨歌』受容だが、そこには、奇妙な空白が従来より指摘されているからである。

桐壺の…巻には三本の虚構の軸が設定されている。桐壺更衣をめぐる愛と死、光源氏の生誕と成長、藤壺の登場とそのひとへ寄せる光源氏の思慕。このうち、第一の、桐壺更衣をめぐる愛と死の虚構軸に沿ってのみ、いわゆる長恨歌の影響が看られ、第二、第三の虚構軸にそってはまったく長恨歌の影響が看られない、という顕著な本文上の事実が報告されている。（藤井貞和前掲論文）[19]

新間一美氏も、「桐壺巻を大きく三段に分け」、「（一）帝の更衣への愛と光源氏の誕生。更衣の死。（二）秋の夜の更衣の里への使い。帝の秋の悲哀。（三）光源氏の成長と藤壺の入内。光源氏の結婚」としたうえで、「このうち長恨歌の物語に関わる記事がはっきりと現れるのは（一）と（二）である」とその対応を語る（新間「桐と長恨歌と桐壺巻」、注11所掲）。

『源氏物語』の冒頭に深く刻印された『長恨歌』は、しかし肝心の主人公達の形象に直接的には相渉ることなく、古代物語の常套に倣って、冒頭に必ず記される、主人公の父母達の紹介に寄与するだけものなのだろうか。[20]

この空白に、ほぼ即応するのが、これまで輪郭を描いてきた、もう一つの楊貴妃説話であった、というのが、本稿の理解である。しかし『長恨歌』の楊貴妃は、桐壺更衣に直接するから、ここには解釈もしくは准拠の変更が存在することになるだろうか。そうした転嫁は、「大かたはつくり事なる中に、いささかの事を、より所にして、そのさまをかへなどしてかけることあり、又かならず一人を一人にあてて作れるにもあらず」という宣長の准拠論（『玉ノ小櫛』『本居宣長全集』）を引くまでもなく『源氏物語』の主人公光源氏に、あまた見られるところ。しかしここは、転用ととるべきではなく、むしろ准拠に、必然的な連続がある、と見るべきである。その連続とは、楊貴妃に准えられる桐壺「更衣によく似ているということで、いわば更衣の形代として入内してきた」（久富木原玲「藤壺造型の位相―逆流する『伊勢物語』前史―」『源氏物語研究集成』第五巻、二〇〇〇）、いわばもう一人の桐壺更衣たる義母、藤壺の存在そのものなのである。[21]

では、それらは、物語の中でどのように即応するのか。具体的に対応を見てみよう。

まず玄宗・楊貴妃・安禄山をそれぞれ結ぶ、寵愛の三角形ときわめて相似的な、桐壺・藤壺・光源氏の三角形について、その外在的相似。

しかしなにより肝腎なことは、このあやにくな三角関係をなす、帝と源氏と藤壺の三者が、互いにかけがえのない親愛関係で結ばれていることではなかろうか。（中略）源氏はもとより、藤壺の罪障意識も、義母子であり、帝

妃であるといった外在的理由以上に、二人の最大の理解者であり庇護者である帝への背信という、もっとも本源的・倫理的な次元に胚胎している。

（後藤祥子「藤壺の宮の造型」森一郎編著『源氏物語作中人物論集―付・源氏物語作中人物論・主要論文目録―』一九九三）

細部について見れば、（A）『源氏』においてすべては光源氏の片恋に起因した。

…いうまでもなく、源氏物語ではもっぱら横恋慕を仕掛けたのは源氏のほうであり、必死にこれを避けながら親愛関係を失わなかった藤壺…　（後藤祥子前掲論文）

（B）光源氏の恋は、亡き母への思いを込めてほのかに藤壺を慕い始め、その思いを帝はほほえましく支える。

源氏の君は、御あたり（＝帝の側）去り給はぬを、まして、しげく渡らせたまふ御方（＝藤壺）は、え恥ぢあへたまはず。…うちおとなびたまへるに、いとわかう美しげにて、切に隠れたまへど、おのづから漏り見たてまつる。母御息所も、影だに思えたまはぬを、いとよう似給へりと、典侍の聞こえけるを、若き御ここちに、いとあはれ」と思ひきこえたまひて、「常に、まゐらまほしう、なづさひ見たてまつらばや」と、おぼえたまふ。上も、限りなき御思ひどちにて、「な疎みたまひそ。あやしくよそへきこえつべきここちなむする。なめしとおぼさで、らうたくしたまへ。つらつき、まみなどは、いとよう似たりしゆゑ、かよひて見えたまふも、似げなからずなむ」など、聞こえつけたまへれば、をさなごちにも、はかなき花紅葉につけても心ざしを見えたてまつる。こよなう心寄せきこえたまへれば…

（C）その思いは確かな恋に変わるが、

源氏の君は、上の常に召しまつはせば、心やすくく里住みもえしたまはず。心のうちには、ただ藤壺の御ありさまを、たぐひなしと思ひきこえて、「さやうならむ人をこそ見め、似る人なくも、おはしけるかな……幼きほどの御ひとへ心にかかりて、いと苦しきまでぞ、おはしける。

（D）成人後は、御簾に入ることを許されない。（E）しかしそのころ既に二人には、「帝の御前で音楽を合奏するとき」「聞こえかよ」ふ、「秘密の恋」の確認があったと見られる（清水好子『源氏の女君　増補版』藤壺宮、一九六七）。

大人になりたまひてのちは、ありしやうに、御簾のうちにも入れたまはず。御遊びのをりをり、琴笛の音に聞こえかよひ、ほのかなる御声をなぐさめにて、内裏住みのみこのましうおぼえたまふ。

（以上『源氏物語』桐壺、古典集成）

そしてその思いは、（F）「王命婦」を「責め歩」く光源氏の「わりな」く、「あやにく」なる密通へとつながり、『源氏物語』最重要の話柄の一つが展開するのである。

藤壺の宮、なやみたまふことありて、まかでたまへり。上の、おぼつかながり嘆ききこえたまふ御けしきも、いといとほしう見たてまつりながら、かかるをりだにと、心もあくがれまどひて、何処にも何処にも、まうでたまはず、内裏にても里にても、昼はつれづれとながめ暮らして、暮るれば、王命婦を責め歩きたまふ。いかがたばかりけむ、いとわりなくて見たてまつるほどさへ、うつつとはおぼえぬぞ、わびしきや。宮も、あさましかりしをおぼしいづるだに、世とともの御もの思ひなるを、さてだにやみなむと深うおぼしたるに、いと心憂くて、いみじき御けしきなるものから、なつかしうらうたげに、さりとてうちとけず、心深うはづかしげなる御もてなしなどの、なほ人に似させたまはぬを、などか、なのめなることだにうちまじりたまはざりけむと、つらうさへぞ思さるる。何ごとをかは聞こえ尽くしたまはむ。くらぶの山に宿りも取らまほしげなれど、あやにくなる短夜にて、あさましうなかなかなり。

（『源氏』若紫）

如上のそれぞれを、帝を挟んだ義母子である安禄山・楊貴妃の関係になぞらえてみよう。（A）（C）の片恋は、『唐国史補』の密かな思慕に通じる。

安禄山恩寵寖深、上前応対、雑以諧謔、而貴妃常在坐、詔令楊氏三夫人約為兄弟、由是禄山心動、及聞馬嵬之死数日歎惋…

（『和刻本漢籍随筆集』第六集）

（B）の帝の関わりは、楊貴妃を養母とした帝の思いと、さらにその後その関係をいいことに、奇妙な戯れをする二人の様をほほえましく見つめる玄宗に通じる。

十載正月一日、此禄山生日（御門の厚遇の逸話）…後三日、召禄山入内貴妃以繡繃子繃禄山、令内人以綵輿舁之、歓呼動地。玄宗使人問之、報云、「貴妃与禄山作三日洗児、洗了又繃禄山、是以歓笑」。玄宗就観之、大悦、因加賞賜貴妃洗児金銀銭物、極楽而罷。自是、宮中皆呼禄山為禄児、不禁其出入、

（唐・姚汝能撰『安禄山事迹』天宝十載）

かつて玄宗の寵愛によって、帝と同じ簾の内を許された安禄山は、右では、光源氏とは逆に、大人であるにもかかわらず禁中での楊貴妃との戯れをゆるされ、逆に児として、楊貴妃より産湯をつかう。成人を境に簾を追われた（D）の光源氏の逆である。（E）の、帝の前で奏でる音楽が二人を密かに結びつけるのは、まさに「胡旋女」の世界そのままである。

またやや時代が下る資料ではあるが、次に引用するように、安禄山の片恋が、帝を侵す「罪」をも畏れず、強引に楊貴妃へせまり、楊貴妃は自らの「罪」にも言及しつつ、かろうじてそれを逃れる、という伝承も存在した。それは（F）に見る、光源氏と、嫋々と光源氏のわりなき思いを拒みつつも受け入れざるを得ない藤壺の、そのあたかも語られざる声のように、どこか通う。登場する宮女の名前が「王命婦」と似た、

「王仙音」であることにも注意したい。

一日禄山酔戯、無礼尤甚。貴妃怒罵曰、「小鬼方一奴耳。聖上偶愛レ爾、今得レ官出二入禁掖一、獲レ私二於吾一、尚敢爾也」。禄山曰、「臣則出二微賤一、惟帝王能興廃也、他皆無レ畏焉。臣万里無レ家、四海一身。死帰二地下一、臣且不レ顧」。叱二貴妃一、復引レ手、抓二貴妃胸乳間一。貴妃泣曰、「吾私汝之故也。罪在レ我而不レ在レ爾。爾今不レ思レ報レ我、尚以レ死脅レ我」。時宮女王仙音旁立、乃大言、「安禄山夷狄賤物、受二恩主上一、蒙二愛貴妃一。乃敢悖慢如レ此、我必奏レ帝」。禄山猶不レ止、云、「奏帝我不レ過二流徒一。極即刑誅。貴妃未二必無レ罪、得下与二貴妃一同受上禍、我所愿レ也…」

（以下、しかし高力士の出現により、結局このたびは思いを果たさず、と続く）

（北宋劉斧編纂『青瑣高議』巻六所収、泰醇『驪山記』、王友懐、王暁勇校注）

また先に引用した『長恨歌抄』やライデン本『長恨歌』では、玄宗の安禄山寵愛に対して、幾度かに渉って、臣下の諫めを説き、それを帝が聞き入れなかったことを語っているが、『新唐書』安禄山伝などに拠れば、天寶四年、「蕃戎」の生まれの安禄山重用に際し、群臣の反対が描かれ、また同六年、先の胡旋舞の記述などに続けて、『新唐書』には、次のように見える。

太子諫曰、「自レ古幄坐非二人臣当レ得。陛下寵二禄山一過、必驕」。帝曰、「胡有二異相一、我欲レ厭レ之」。

（巻二二五上・安禄山伝）

末尾に「相」という言葉が見えることにも注意したい（桐壺巻の「相見」との類似）。『源氏』先の御伽草子『長恨歌』にも「やうきひのてうしんなるかゆへに、さらにこれを（＝帝が）もちひたまはさるは、代のほろびんすいさうなるへし」と帝が読みとるべき「さう」に言及する。群臣の不満は、『源氏』桐壺冒頭に描かれるところ。

上達部・上人なども、あいなく目を側めつつ、いと、まばゆき人の御おぼえなり。唐土にも、かかる事の起りにこそ、世も乱れ、あしかりけれと、やうやう、天の下にもあぢきなう、人のもてなやみぐさになりて、楊貴妃の例も、引き出でつべうなりゆくに…

この「楊貴妃の例」は、直接には光源氏母の「更衣という人物こそ身分不相応な愛され方をして世の「乱れ」が懸念されたのであった」が、物語において「藤壺との密通」は「義母との恋の物語がその基底にあ」り、「更衣の形代として」の女との密通（久富木原玲前掲論文）だった。であれば、そのことは、まさしく藤壺に直接転嫁される。

すると、藤井貞和氏が「楊貴妃の例」を解析して、「楊貴妃の先例を引きあいに出しながら、実際に第二の楊貴妃事件が引き起こされる可能性そのものは否定する…楊貴妃事件的な方向へ物語を進ませていく道をみずから戸鎖し…李夫人の

説話のかたちの方へ別の道を開いていく」（前掲論文）とすることは、むしろ逆であったということになる。そしてそれは、藤井氏の見解への疑義として久富木原玲前掲論文が、「生きていれば必ずそのような事態になることを暗示するのではあるまいか」とした上で、そうならず死を迎えた、その更衣の死を問題の中核に据えて論を進めていくのとも違う。藤壺に「楊貴妃の例」を当てはめて考える私には、この乱れの予言こそが、桐壺更衣から、形代の藤壺へと転嫁されていく契機だと見る。

『新唐書』によれば、安禄山は、天寶六年、楊貴妃の養子となることを請うて許されたが、その時、「其拝必先レ妃後レ帝。帝怪レ之。答曰、「蕃人先レ母後レ父」」とかたって帝を悦ばせ、帝は「与二楊銛及三夫人一為二兄弟一」と命じたという。これより安禄山には「有下乱二天下一意上」ったと描かれる。先に見た如く、楊貴妃と安禄山の傾国の契機は、安禄山の養子に起点を持っていたが、ここではそれが、安禄山の天下を「乱」す「意」の発意として、よりはっきりと記されている。そしてそれは、帝より義母を先とする、という「蕃人」の「礼」の名を借りて、実は明示的であった。その後、楊貴妃は、安禄山を我が子のように「洗児」し、まさに子となった安禄山は、その後禁中の出入を許される。

『源氏』の「乱れ」も、実は、明示されて准えられる桐壺の更衣に対してではなく、その「形代」、藤壺という義母の誕生に起因していた。『源氏』は、母への思いを揺曳する幼い淡い思いを描きつつ、髭を生やした大人が義母となったその人の手で沐浴するという安禄山逸話の異常[22]を反転させ、それとは逆に、成人した光源氏は、簾の内から追われる。以前のように見えられなくなったそのことで、より深い思いを光源氏に籠めさせて、あたかも品格ある貴種の想いの果てに、後の密通を暗示するという構想へ、転じているのである。

最後に、『源氏』藤壺をめぐるもう一つの重要な要素として、「桐壺とその子光源氏の両方に愛される藤壺の像が浮かび上がってくる」（久富木原玲前掲論文）などとされる、その「像」のことにも、触れておきたい。それは、「貴妃はもと親王の妻也。それを玄宗めしたるなり」と『続古事談』にも記された、楊貴妃が、玄宗とその子両方に愛される結果となった逸話との対応のことである。玄宗の皇太子ならざる「親王」だった寿王の妻楊貴妃を玄宗が奪い、自らの妃とするこの逸話は、『長恨歌』には省かれた古い楊貴妃の史実[23]であるが、それは、『源氏』の桐壺帝・藤壺と、やはり皇太子ならざる光源氏との三角形の構図を、また逆順（一方は帝が子の妻を奪い、一方は子が帝の妻を奪う）に反転しつつ、鮮やかに照応することになる、ということを指摘しておきたい。

おわりに

こうして、如上の「長恨歌体験」は、主人公の父母達に多

くその影を曳きながら、実は物語のその後の男女主人公、光源氏と藤壺を諷しつつ、物語全体に及ぼうとするものではなかったか。その連続は、『長恨歌』の楊貴妃が寓意する桐壺更衣とその「更衣によく似ているということで、いわば更衣の形代として入内してきた」（久富木原玲前掲論文）、いわばもう一人の桐壺更衣たる、また帝妃であって、何より光源氏からは義母に当たる、藤壺の相似性の創作にその根幹を置く。「第一部の前半の」「大筋」において、「一切の事件は藤壺にかかわっていた」（清水好子前掲論文）という。また如上は、主人公光源氏の准拠として一体のものであるならば、それは、『源氏物語』構想の根源に関わるようにも思う。

以上が本稿のあらましであるが、しかし、本稿の推定には、唐代の情報を記した中国文献の日本での享受について、多く未確認の部分を含む。今日では不明ながら、日本にも、そうした知識が意外と早く多様に入っていたのではないかとも考えてはいるが、文献的には、中国の文献をそのままスライドさせたり、後代の中国文献を用いたりして、不安な推測、あるいは倒錯が多すぎるという批判は甘受しなければならない。しかし一方、資料で埋められる部分を超えた『源氏物語』作者自身の資料解釈や創造力ということが、第一義的にそこには介在するのである。ならば余計に、正確な理解の前提に、知りうる限りの文献の博捜が必要となるが、それは稿者の力量に余る仕事である。

そもそも本稿は、私の『続古事談』注釈ノートの展開を少し細かく記したものである。故に、『源氏物語』『長恨歌』双方に関して重要な文献の見落としがあることも懼れる。かたがた、広くご教示を仰ぎたい。

※文中に明記した以外の引用本文は、『旧唐書』『新唐書』（中華書局版、点校本。なお台湾中央研究院漢籍電子文獻他を適宜検索）、『白氏文集』は平岡武夫・今井清校定（京都大学人文科学研究所）をもとに、諸注釈や金沢文庫本影印などを参照。『安禄山事迹』は曾貽芬校点『安禄山事迹』（上海古籍出版社）所載によったが、同書には安禄山・楊貴妃関連の史書の記述が集成される。各テキスト引用に際し、旧字・繁体字・簡体字等を通行の字体に改め、返り点や句読点を補い、また削除などした部分がある。

注

(1)この言葉は「長恨歌絵・長恨歌説話の大流行を、いま仮りに時代の長恨歌体験と呼んでおこう。長恨歌と、それの由来する楊貴妃の説話は、きわもの的に、あまりにもあまねく世人の共通の記憶に知られていた」とする藤井貞和「光源氏物語の端緒の成立」（『源氏物語の始源と現在』定本版、一九八〇）の用語に准じる。なお『長恨歌』をめぐる享受の詳細については新間一美の諸論（後述）、また上野英二「平安朝の物語―長恨歌から源氏物語へ」（『源氏物語序説』一九九五、初出は一九八二）、また近年の研究動向については胡潔「「長恨歌」と「桐壺」巻」（伊井春樹編『海外における源氏物語の世界』二〇〇四）参照。

(2)『玉葉』とほぼ同趣旨が『花鳥余情』に続けて引用されている。〈安禄山絵〉は、金刀比羅本の『平治』では「大なる三巻の書」(旧大系)とその規模も描かれるが、『玉葉』には治承三(一一七九)年九月四日条に「自内賜二預玄宗皇帝絵六巻一、為レ令二一見一也」、同六日条に、「今旦返二上玄宗皇帝絵一」とある。なお遠藤実夫『長恨歌研究』、及び同書が言及する『考古画譜』参照。なお「この「抑」で始まる文は、当日前段の除目の記事と切り離された形で書かれており、前後の脈絡を示す言葉は何一つ見ることはできない」(池田利夫『日中比較文学の基礎研究　翻訳説話とその典拠　補訂版』第一章)。またこれより先の叙述で、『平治物語』自体が「おほけなき振舞」の信頼を「弥子瑕にもすぎ、安禄山にもこえたり」と譬えている。

(3)『続古事談』本文は名大小林文庫本を底本に、諸本を私に校訂したテキストを用いる。説話番号等は神戸説話研究会『続古事談注解』に依拠。

(4)五味氏の如上の発言は、石井進氏の見解を踏まえてのもの(同論文注参照)。また岩田準一『本朝男色考』参照。なお「むことり三位」とは範家が通憲五男脩範を娘婿としたことの揶揄(『続古事談注解』)。

(5)一連の説話について、私に註釈稿を有するが、現在優れた先駆的研究に増田欣『中世文藝比較文学論考』第三章「説話文学における中国文学的要素」第一節「続古事談における中国文学的要素」1「漢朝篇に見える楊貴妃説話」二〇〇〇、初出一九八八)があり、本稿は多くを負う。なお六―三の「或唐書」は『旧唐書』に相当し、引用本文「肥膚」は、「肌膚」とありたい所だが、『長恨歌』にいう「凝脂」に通ずるか。「ゐむ」は韻で、おもむきの意だろう。『唐書』の一文は、尸解仙であるという伝承の趣旨に合っている、の意。以上『続古事談』は、皮膚・姿が消えて、香袋ばかりが残っている、と『旧唐書』の文を解釈。誤読であろうが、この解釈が楊貴妃尸解仙説を支える(増田欣前掲論文)

(6)宮内庁書陵部蔵の勧修寺本は説話毎に一行をあけ、六―三と同四との間にも一行空白を設けるが、六―二(1)と六―二(2)とは改行のみで区切られ、空白を設けない。ただし、ここではそうした形態の問題を論じようというのではない。

(7)増田欣前掲書同章同節2「漢朝篇に見える漢文帝の倹徳説話」(初出一九八八)、また、木下資一「『続古事談』と承久の変前夜」(『国語と国文学』一九八八―五)参照。

(8)木下資一注7所掲論文、同『続古事談注解』解説、同「『続古事談』長兼編者説再論―任子説話の位置のことなど―」池上洵一編『論集説話と説話集』二〇〇一)など。なお『続古事談』作者説については拙稿「『続古事談』作者論の視界―勧修寺流藤原定経とその周辺」(『日本古典文学史の課題と方法―漢詩　和歌　物語から説話　唱導へ―』、二〇〇四―三)に整理を試みた。

(9)曾永義氏の論考は、「楊貴妃故事的発展及与之有関的文学」で、同氏著『説俗文学』(聯経出版事業公司、一九八〇)によって確認した。

(10)その資料性については、池田利夫氏に「通憲が長恨歌絵を作るのに拠った「唐書及唐暦、唐紀、楊妃内伝」とある唐紀は、旧唐書本紀を指すのであろうか。唐暦は亡佚して今に伝わらないが、唐紀が唐書本紀でなく、漢紀のように、漢書本紀とは異なる性質の本を指すのであれば、それも今に伝わらない。そうすると楊妃内伝という書物もないことになってしまう。ここを「唐書及び唐

暦、そして唐書の中では唐紀と楊妃内伝」と読みうるかどうか甚だ疑わしいが、楊妃内伝が、唐書列伝の后妃、玄宗楊貴妃の条を指すなら、新旧唐書とも列伝第一に収められている。いずれにせよ、唐の楽史の作る楊太真外伝は、楊妃内伝という呼び名に対称的である。」（池田利夫前掲論文）という推定があるように、「数家之」がどこまでかかるのか（「数」は多い数をあらわすので〈山口明穂「「数」の字考」『中世国語における文語の研究』〉、二つの新旧『唐書』を指すとは考えにくい）など、『玉葉』の区切りについても未解決の部分を有す。「数家」また、「唐紀」については、『続古事談』六―五の出典と考えられる『温泉記』を所収する『青瑣高議』に、同じ張兪が登場する登場する『驪山記』という小説が載るが、増田氏はその中に見える主人公、張兪の「吾嘗観二唐紀一、見下妃与二禄山一事上。則未二之信一…」という質問に見える「唐紀」を「『資治通鑑』の「唐紀」を指すと見て誤りはないであろう。古老の答えの中に、「禄山与二貴妃一嬉遊（中略）貴妃慮二其醜声落二民間一、乃以二禄山一為レ子」と類似の措辞も見えるし、「史氏書レ此作レ戒二後世一」とあるのも司馬光の撰史の意図を捉えて言ったものと思われるのである」と解釈する。しかし一方、増田氏は、中国の史書国外輸出厳禁策に言及し、『資治通鑑』の日本に於ける受容の古例として十四世紀初頭の花園天皇あたりにまでしかさかのぼれないことをいうから、その場合信西の「唐紀」とは別のものとなるがいかが。また『妙槐記』文応元（一二六〇）年に見える「唐紀第一并玄宗一二三四…」という記事の「唐紀」をあるいは「『資治通鑑』の「唐紀」を指すか」ともいう。増田氏が信西の「唐紀」には言及されないこともあって、依然問題は残る。

(11)新間一美「桐と長恨歌と桐壺巻」（『源氏物語と白居易の文学』二〇〇三、初出一九八三）による。『長恨歌序』の成立については異論があるが、上記は、これを「中国で作られたか、中国で作られたものに平安中期頃までに手を加えてつくられたか」と見る新間一美氏（「白居易の長恨歌―日本における受容に関連して―」（『白居易研究講座』第二巻、一九九三―七）の立場からの要約。邦人作と理解（太田次男氏他）しても、享受の様相としては大差はない。

(12)なお後代の中国や日本における『長恨歌』および楊貴妃説話の展開については遠藤実夫前掲書（注2）、胡鳳丹『馬嵬志』などの他、近年の竹村則行『楊貴妃文学史研究』（二〇〇三）に詳細な研究があるが、本稿の論述とは直接関連しない。

(13)「外禄山」という表現とその解釈は、安禄山を「又その外の密夫」とする『続古事談』の表現とも共通し興味深い。

(14)「新楽府」の文脈では当然「…安禄山申ケル様…我レ楊貴妃ノ養子ナレトモ、御門ヲ失イ詣ラセムヨリハ、此等ヲ失ヘシト申シテ、軍ヲ発シテ失ケリ」（真福寺本『新楽府注』）と語られ、また金刀比羅本『平治物語』中（義朝内海下向の事付けたり忠致心替りの事）に「異国の安禄山は主君玄宗をかたぶけ、養母楊貴妃をころし」と養母説に言及される。

(15)楊貴妃仙人説には先蹤（『注好撰』『長恨歌序』）があるが、尸解仙説は『続古事談』以外には知られていない。遡りうる古例があるならば、空蟬について謂われる尸解仙説と唐代伝奇の関わり（高田祐彦「唐代伝奇から源氏物語へ―空蟬の物語をめぐって」『源氏物語の文学史』二〇〇三、初出は一九九三）にも連関する。

(16)『源氏物語』における『長恨歌』享受、また『紫式部日記』に

伝える中宮彰子への「新楽府」進講。

(17)『長恨歌抄』についての近年の研究動向として、安野博之「清原宣賢自筆『長恨歌・琵琶行抄』の成立」『国語と国文学』二〇〇三―一二）に教えられるところが多い。「前文」の用語も同稿に倣う。

(18)静永健『白居易「諷喩詩」の研究』（二〇〇〇）。氏はそれを白居易の地歩の変化による「政治的拘束力による」「変化」「転向」と見る。

(19)藤井氏は、源氏桐壺が持つ「諸姫の嫉妬・排斥・不安・怨恨」の要素について『長恨歌』・陳鴻『長恨歌伝』に見えず、「女主人公の病臥、退出がち…の要素は片鱗も長恨歌のうえに見いだすことができない……帝が、病める寵妃ゆえに溺愛を示し、他人の譏りをも弁えなかったという要素であるが、長恨歌の語り口には、それは、すっぽりと、欠落させられている」と指摘し、この要素の欠落について、漢李夫人説話の影響を見ようとする。その漢李夫人イメージの桐壺巻における影響について、漢籍の用例を博捜して詳細に論じるのが新間一美氏の一連の論考（「源氏物語と白居易の「長恨歌」「李夫人」」として、『源氏物語と白居易の文学』二〇〇三、の第一部となった諸篇など）である。

(20)一方で、『長恨歌』の影響は『源氏』結末にまで及ぶという（新間氏「源氏物語の結末について」前掲書所収、など参照）。

(21)新間氏は李夫人説話との類似を踏まえ、「光源氏は亡き母の魂を求めるのである。その魂は現実の人間である藤壺に置き換えられ、光源氏は藤壺を思慕し続ける」（「李夫人と桐壺巻」、前掲書）という。

(22)この場面はライデン本と同系の御伽草子『長恨歌』に絵として描かれる（龍谷大学本〈『龍谷大学善本叢書　奈良絵本』〉、中野幸一蔵本〈中野編『奈良絵本絵巻集9』〉など）。

(23)『新唐書』「楊貴妃伝」に年紀を記さず「始為二寿王妃一」とある。『資治通鑑』唐紀三十によれば開元二十三年十二月「冊二故蜀州司戸楊玄琰女為二寿王妃一」開元二十三（七三五）年十二月。『楊太真外伝』（『国訳漢文大成　晋唐小説』）は二十二年十一月。なお『長恨歌』仮名抄にもこの逸話は詳細に触れられる。

（あらき・ひろし　本学大学院助教授）